

# 文章構造の日韓対照研究

## —新聞の社説における書き出しを対象として—

李 貞旼

### 要 旨

本稿では、日韓の新聞の社説における書き出しの類型を、形式と内容の両面から、分析した。その結果、書き出しの方法における日韓間の違いとして、次の2点が明らかになった。①内容の面からは、日本語の新聞の社説が、書き手の事柄に対する客観的な態度を表わす「事実」から書き出す傾向があるのに対し、韓国語は書き手の事柄に対する判断や見解などの主観的な態度を表わす「意見」から書き出す傾向がある。②形式の面からは、「意見」を表す文末述部を中心としてみた場合、日本語は「断定」表現をあまり使用しない傾向が強いが、韓国語は大部分が「断定」表現で書き出される傾向が強い。また、日本語では見られなかった主張の度合いが最も強いとされる当為表現が韓国語の書き出しには見られる。

「書き出しは以下に述べる表現全体を導き、文章全体の調子にも影響する」(市川：1971)という立場から考えると、書き出しは、文章構造を考える際に非常に重要な役割を果たすと考えられ、以上の結果のような日韓の書き出しの類型の違いは文章全体の構造の類型にも何らかの影響を及ぼすと考えられる。

【キーワード】 文章構造 書き出し 文末述部 事実 意見

### 1 はじめに

Kaplan (1966) は、英語学習者を対象にその英作文の文章の運び方を調査した。その結果、韓国人、中国人、日本人など、いわゆる“オリエンタル”の文章の運び方は、間接的で外側からだんだん中へ渦を巻いて進んでいく論理構造を持つと指摘した。この指摘は第一言語の影響を念頭においたものであると推測されるが、筆者の経験から言えば、Kaplan によって“オリエンタル”と一括りにされた韓国語と日本語とはその文章の展開の仕方に異なりが見られることが予想される。しかし、今まで日韓の

文章構造の違いに着目した研究は、李（1999）などわずかに見られるだけで、まだ緒についたばかりである。本稿は「見出し」と「提題表現・叙述表現・反復表現」の関係に着目して日韓の文章構造の違いを明らかにしようとした李（前掲書）に続く研究であり、今回は文章の書き出し部分に着目して分析を行ったものである。ここで書き出しに注目した理由は以下の通りである。

書き出しの役割・重要性について、市川（1971：335-336）は「以下に展開する表現全体を導く。以下の内容を引き出すだけでなく、文章全体の調子にも影響する。」と述べている。また、相原（1984：141）でも、「書き出しは、その筆者と読者とが初めて顔を合わせる場面であるから、その意味でも重要であろう。」と述べ、「冒頭、書き起こし<sup>註1</sup>に課せられる使命の最大なるものは、筆者自身がこれから展開しようとする場面、あるいは論理の世界に、いかに読者を抵抗なく導き入れるか、ということにあるのではなからうか。」（同：145）と冒頭・書き起こしの誘引性を強調している。そして、文章において冒頭・書き起こしが重視される理由として、「1、それが文章全体の性格や方向を規制する。2、冒頭の読者に与える効果や影響が大きい。」の二点に要約されると指摘している。以上の点から、書き出しは、文章構造を考える際に、非常に重要な役割を担っていると言える。

## 2 先行研究及び本稿の位置づけ

### 2.1 文末述部の表現形式についての先行研究

永野（1986：232）では「述語は原則として文末に位置するものであり、その文末の陳述形式は文全体の表現意図をになっている」と指摘されており、野村（1990：71）でも「叙述表現は提題表現と呼応して文を構成するもので、その中心的な役割をはたすのが述語」であるとされるように、文末述部は、文をあるいは、文章を理解するうえで、大変重要な役割を果たすものであると言える。この文末述部の形式を分類したものには、永野（1986）、木戸（1992）、伊藤（1996）、メイナード（1997）などがあるが、まず、永野（前掲書）は、「辞に関する分類語例表」の中に「態度による分類」をもうけている。そこでは、叙述表現を「客体的事象の叙述」「主体的立場の陳述」「読み手への働きかけ」に三分類し、それぞれの定義を行っている。木戸（前掲書：10）では、文単位で表わされる文章構造の要素として「文の機能」を設定し、「機能」とは「意図の表現手段で、言語形式上の手がかりから判定できる要素である。」と述べ

られている。そしてその文の機能は、主張、評価、理由、根拠、解説、報告に分類できるとされている。また、伊藤（前掲書：204）は永野の「辞に関する分類語例表」に一部、林（1960）の「結びの四段階（描叙、判断、表出、伝達）の分類観点を加え、「文末述部の表現の分類と語例」を作成している。さらに、メイナード（前掲書：131-132）では、文の陳述の方法を探るために文の種類を記述文（非コメント文）と意見文（コメント文）の二種類に大別している。

## 2.2 内容と書き出しとの関係についての先行研究

文章を書く作業において、書き手は自分がこれから述べようとする内容について、どのように書き出すかを判断しなければならない。市川（1971：335-336）でも書き出しと結びの項目において「始発の表現<sup>22</sup>は、どういうことの叙述から文章をスタートさせるかの問題である。内容を質的に分けて考えてみた場合、事実の叙述からはいるか、自分の見解をまず最初に述べるかというような選択が必要」であるとされるように、書き手はこれから書く内容を、事柄の事実から述べていくか、その事柄に対する自分の意見を先に述べて文章を展開していくかの選択をする必要がある。また、書き出しを内容的な関係から分類したものとしては、市川（前掲書）の他に、時枝（1977）、林（1983）、市川（1978）、林（1983）、相原（1984）、西田（1992）などがある。しかし、これらの先行研究は書き出しを含む冒頭について述べているものであったり、書き出しという用語を使っているながら実際には冒頭の内容を区分しているものであったり、分析対象としているものが、論説文ではない小説、文章一般であったりする。言うまでもなく、小説と論説文を同じ枠組みで論じることができないため、本稿では枠組みを新たに設けることにした。さらに、本稿では後述するように、書き出しと冒頭を区別して考えているため、これらの研究についての詳細は割愛する。また、長坂（1994）では、書き出しを冒頭文として、その性質と機能を分析しているが、文章構造という観点からの分析は行っていない。さらに市川（1971）では、具体的な分析は行われていない。そこで本稿では市川にならって、書き出しを質的に分け、その内容が事実から述べられているか、意見から述べられているかを検証した。その方法としては、前述の文末述部を中心的な手掛かりとし、後述する副詞などの役割をも考慮に入れ、分析を行った。

## 2.3 本稿の位置づけ

本稿では、書き出しの類型を内容から分析するにあたって、書き手の表現意図をより正確にとらえるため、表現内容を「事実」を述べるものと「意見」を述べるものとに大別し、文末述部、さらに、書き手の主観的立場、気持ちを表す副詞などを考慮に入れ、分析を行った。文末述部を重要な手掛かりとしている点では、上記の文末述部の表現形式についての先行研究と一致する点があるが、先行研究では、書き手の主観的な判断などが現れる他の要素、例えば、副詞などの観点は含まれておらず、文末述部だけに焦点を当てて分析を行っている。また、文末述部においても表現形式に重点をおいての分類<sup>23</sup>であるため、書き手の表現意図が正確に捉えられているとは言えないように思われる。

そこで本稿では、森本（1994）が書き手の主観的な態度が表れている副詞として指摘した 29 種類<sup>24</sup>の主観的態度を表す副詞も考察対象とする。また、本稿では、森本（前掲書）で選ばれている副詞以外にも、文脈から書き手の判断、気持ちを表すものと判断されるものが文全体の意味内容にかかわる場合は、書き手の主観的な態度を表す文として分類した。これについての例は後に述べる。

また、形式からの分類では、同じく「意見」を表す文でも文末述部の表現形式によっては主張度が強いものと弱いものがあると考えられる。そこで本稿では「意見」を表す書き出しを中心に、日韓間の「意見」の表し方にはどのような違いがあるかを比較してみた。形式からみた書き出しの類型に関する詳細は次章で述べる。

## 3 調査資料・方法

### 3.1 調査資料

本稿では、朝日新聞（45 文章）、毎日新聞（54 文章）、そして、朝鮮日報（58 文章）、東亜日報（60 文章）の日韓の新聞社の各 2 社、計 4 社の新聞の各々 1 ヶ月分（1997 年度 4 月分）<sup>25</sup>の社説の文章を用いて分析を試みた。

### 3.2 調査方法及び枠組み

書き出しの用語に関しては、書き出しの他に、冒頭、冒頭文、書き起こし、冒頭書き出し、章初表現などと呼ばれることもある。しかし、これらのうちには冒頭と書き

出しの意味がはっきり区別されているものと区別されていないものがある。本稿では、時枝（1977：63）の「文章における冒頭は、文章の「書き出し」とは別である。どのような文章も、書き出しの無い文章はないが、冒頭の無い文章というものはあり得る」という記述に従って書き出しと冒頭を区別し、以下では「書き出し」という用語を用いる。さらに指定されている範囲についても、一文を指している人もいれば、形式段落としての一段落を指している人もいる（例えば、市川（1971）、長坂（1994）、中西（1996）など）。また、内容上の一まとまりとして幾つかの文を指している人もいる（例えば、市川（1971）、相原（1984）など）。しかし、その内容上の一まとまりというものの基準がはっきりしていない。そこで本稿では処理のしやすさと、市川（1971：335-336）で、「文章は、始めの文と終わりの文とには含まれた領域として成立するのであり、文章をどのようにして始め、どのようにして終わらせるかということは文章としての輪郭・境界を具体的に決定するはたらしきをもつ。これが、文章の始発・終結の表現として「書き出し」「結び」を重視する観点」だとしていることから、ここでは、書き出しを内容上のひとまとまりとしての段落ではない筆者の句点を基準にしての一文を対象として考察していく。そして、一文あるいは一文章において書き手の表現意図を担っている主なものは、永野（前掲書）などでも指摘されるように文末述部である。形式からみた場合、日本語も韓国語も文末述部の核になるのは、「動詞」「形容詞」「名詞＋だ」（卓 1999:148）であり、これら文末述部は、場合によっては、用言の語幹に補助動詞、補助形容詞、助動詞がつき、語尾、または助詞で完結される。さらに、これらは、現在形、過去形などで表される。また内容からみた場合は、事実や体験を提示するもの、意見や見解を述べるものなどに区別されよう。なお、文末述部であるが、重文についても検討しなければいけないと思うが、日韓では重文の使われる数が異なる傾向があるため、ここでは主文末のみを対象とすることにした。これについては今後さらに検討する必要があるだろう。

枠組みについてであるが、本稿では、市川（1971）で、書き出しの内容を質的に分けて、「事実の叙述からはいるか、自分の見解をまず最初に述べるか」というような選択が必要であると指摘しておられるが、その詳細については記述されていない。そこで本稿では市川（前掲書）の指摘を踏まえた上で、書き出しの類型を「事実」、「意見」、「準意見」、「その他」に分けて書き出しの類型を分類した。

以下に書き出しの類型の定義を行い、その具体例を示す。

「a 事実」：書き手の事柄に対する客観的な態度が表われている文である。書き手の主観的な態度を表す副詞などの他の要素が含まれておらず、典型的に事実を表す。一般的には、動詞・形容詞の終止形、過去形、体言止め、引用文、状態・推移を表す接尾語などで終わる文である。しかし、これらのうち、文脈によって、意見に含めた方がよいと思われるものは意見に含める。例えば、「もどかしさ、はがゆきがつる」、「思う」、「考える」、「望ましい」、等である。

以下にその例をデータから示す。

- (1) 新進党の大会が 23 日開かれる。
- (2) 서울시가 시내버스개혁 종합대책을 내놓았다. (ソウル市が市内バス改革の総合対策を持ち出した。)
- (3) 東京では桜が満開となった先月 30 日のこと。

書き手の主観的な態度を表す副詞、助動詞などがついておらず、動詞の終止形 (1)、動詞の過去形 (2)、名詞止め (3)、のように文末述部で終わっている書き出しを、典型的に事実を表す文「a 事実」として分類する。さらに、その他、状態・推移を表わす接尾語 (例：東アジアはいま、「政治の季節」を迎えている。)、また、引用文 (例：「うそつき」。) で終わっているものなどもここに含める。

「b 意見」：書き手の事柄に対する判断や見解などの主観的な態度が表われている文で、典型的に意見を表す文。このカテゴリーに含まれる文は、他の要素の有無にかかわらず、文末述部だけをみても、書き手の判断が現れているのがはっきり分かる。その文末述部は、一般的に、推定、許容、可能、性状規定表現 (伊藤 (1994) による：例えば、嘘だ、ふさわしいなど)、当為、意志、願望、感情・思考表現、依頼、命令、禁止表現等がここに含まれる。

以下にその例を示す。

- (4) もし事実であるなら、まさしく非人道的な国家の犯罪と呼ぶべきだろう。
- (5) 政府のダイオキシン対策には、もどかしさ、はがゆきがつる。
- (6) 「북한동포 돕기」는 차별하게 실질적으로 추진해야 한다. (「北朝鮮援助」)

は沈着に実質的に推進すべきだ。)

(4) は「べき」に「だろう」という当為表現に推定表現が加わった表現(べきだろう)で書き手の見解を示しており、(5) は「もどかしさ、はがゆさがつのる」という表現で動詞の終止形でありながらも、書き手の性状規定表現として意見に分類される。また(6)も、추진해야 한다(推進すべきだ)で、事柄に対し、当然そうする義務があるという書き手の判断を当為表現で表している。以上のような書き出しを典型的な「b 意見」として分類する。その他、許容、可能、意志、願望、感情・思考表現、依頼、命令、禁止表現等をここに含める。

「c 準意見」: 文末述部だけで判断すると、事実を表わす表現形式が使われているが、書き手の主観的な態度を表す副詞など、他の要素により、純粋に事実を述べているものでなく、書き手の気持ちや主観が表われている文。

以下にその例を示す。

- (7) 「核兵器のない世界」をめざすはずの包括的核実験禁止条約(CTBT)の衣の下から、怪しげな鎧(よろい)がのぞいた。
- (8) 戦後五十年をきっかけに計画されたものの、棚上げ状態になっていたアジア歴史資料センターが、ようやく動き出しような気配になっている。
- (9) 「またか」というか「やはり」というか、動力炉・核燃料開発事業団(動燃)の事故隠し体質が改めて浮き彫りにされた。
- (10) 서울 도심 지하철 공사장에서 또 가스폭발사고가 났다. (ソウル都心地下鉄工事場でまたガス爆発事故が起きた。)
- (11) 한반정국에 밀려 큰 관심을 끌지는 못했으나 대법원은 그저께 매우 중요한 판결 하나를 내렸다. (韓寶政局に押され大きな関心を引くことはなかったが、大法院は一昨日ととても重要な判決一つを下した。)

(7) ~ (11) の文末述部の表現形式は一般的に事実を表すものであるが、書き手の主観的な態度を表す副詞や助動詞などの他の要素が加わることにより、書き手の気持ちや主観が表れている。例えば、(7) は下線部の「めざすはず」の「はず」という助動詞的な要素によって書き手の主観が表わされており、さらに「怪しげな」という形容動詞により、事柄に対する書き手の感情が表わされている。(8) も「よ

うやく」という副詞によって事柄に対する書き手の気持ちが示されており、また「動き出しそうな」の「そうな」という推量を表す助動詞で、書き手の見解が示されていることが窺える。(9)は「「またか」というか「やはり」というか」で書き手の気持ちが充分窺えるし、また「改めて」という副詞がさらに追加されることにより、書き手の意見がより強く伝わる形になっている。そして(10)も「또 (また)」<sup>註6</sup>という副詞で起きてはならない事故がまた起きたとの書き手の気持ちを充分伝えている。さらに(11)も「매우 중요한 (とても重要な)」の「매우 (とても)」という副詞と、重要性を表す形容動詞の「중요한 (重要な)」によって書き手の見解が表わされていると判断できる。

本稿ではこのように、文末述部は事実を表すが他の要素により書き手の判断が加わっていると判断されるものを「c 準意見」として分類し、典型的な「b 意見」とは区別して分析を行った。

「d その他」: 書き出しの一文だけでは事実、意見、準意見のどちらにも判断できない文。

以下にその例を示す。

(12) いまの景気はいいのか悪いのか。

(13) 脳死は人の死なのか。

(14) 한보의 총수 鄭泰守(정태수)씨에게서 뭔가 「한보 의혹」을 풀어줄 새로운 증언이 나오기를 기대했던 국민들이 어리석었던 것일까. (韓寶の総帥鄭泰守氏から何か「韓寶疑惑」を解いてくれる新しい証言が出てくることを期待していた国民が愚かだったのだろうか?)

(12) ~ (14) は問いかけ、反問の表現であり、全体の文脈からみると書き手の主張が表れていることが分かるが、書き出しだけで判断するにはその根拠が充分ではないので、ここでは「d その他」として分類する。

また本稿では、「意見」を表す表現には、主張度の強弱があると判断し、その意見の表し方に日韓間でどのような差が出るかを調べるため、内容的に典型的な「意見」を表すもののみを取りだしてその文末述部の表現形式の表し方、つまり、本稿でいう書き出しの形式からの類型を日韓比較した。これについては、推量、断定、願望、当



為の4つの枠組みで分析を行った。さらに本稿では性状規定表現、感情・思考表現、命令、禁止表現などは断定として分析を行った。

## 4 調査結果

### 4.1 内容からみた書き出しの類型

〈表1〉は、書き出しの類型を内容から調査した結果を示したものである。表から分かるように、日本語の新聞の社説（朝日新聞、毎日新聞）では、書き手の事柄に対する判断や見解などの主観的な態度を直接表わして書き出す典型的な「b 意見」はそれぞれ、3 (6.52)、8 (14.81)であり、全体の2割にも達していないという少数である。それに対し、書き手の事柄に対する客観的な態度が表われている典型的な「a 事実」は、それぞれ、31 (67.39)、41 (75.92)で全体の約7割を占めている。

〈表1〉内容から見た日韓の書き出しの類型 ( )内は%

書き出しの種類 \ 新聞の種類	朝日新聞	毎日新聞	朝鮮日報	東亜日報
a 事実	31 (67.39)	41 (75.92)	26 (44.82)	20 (33.33)
b 意見	3 (6.52)	8 (14.81)	24 (41.37)	26 (43.33)
c 準意見	5 (10.86)	4 (7.40)	7 (12.06)	14 (23.33)
d その他	7 (15.21)	1 (1.85)	1 (1.72)	0 (0)
合計	46 (100)	54 (100)	58 (100)	60 (100)

一方、韓国語（朝鮮日報、東亜日報）では逆に、書き手の事柄に対する判断や見解などの主観的な態度が表われている典型的な「b 意見」を述べているものがそれぞれ 24 (41.37)、26 (43.33)で全体の4割以上を占めており、26 (44.82)、20 (33.33)を占めている「a 事実」とほぼ同じか、むしろ「b 意見」が多く使われている。

また、文末述部だけで判断すると事実を表わす表現形式が使われているが、書き手の主観的な態度を表す副詞など、他の要素により、純粹に事実を述べているものでなく、書き手の気持ちや主観が表れている「準意見」に関しては、日韓間に類似した傾向が見られる。即ち、朝日新聞と毎日新聞ではそれぞれ、5 (10.86)、4 (7.40)で全体の約1割であり、朝鮮日報と東亜日報においても、それぞれ、7 (12.06)、1

4 (23.33)で全体の約1～2割である。また、今回の資料では、他の新聞に比べ、朝日新聞に問いかけ表現、反問的表現の「その他に分類」が多く含まれているのが特徴的であった。

#### 4.2 「意見」の文末述部の表現形式からみた書き出しの種類

また本稿では、伊藤（1996）などでも指摘されているように、「意見」を表す表現には、主張度の強弱があると判断し、その意見の表し方には日韓間でどのような差があるかを探った。まず、内容的に典型的な「意見」を表すもののみを取りだして、その文末述部の表現形式を主張度の強弱として、推量、断定、願望、当為の4つの枠組みで分析を行い、日韓比較対照してみた。

〈表2〉形式からみた日韓の書き出しの種類

( ) 内は%

意見の種類 \ 新聞の種類	朝日新聞	毎日新聞	朝鮮日報	東亜日報
推量	2 (66.66)	3 (37.50)	2 ( 8.33)	0 ( 0)
断定	1 (33.33)	5 (62.50)	19 (79.16)	24 (92.30)
願望	0 ( 0)	0 ( 0)	1 ( 4.16)	1 ( 3.84)
当為	0 ( 0)	0 ( 0)	2 ( 8.33)	1 ( 3.84)
合計	3 ( 100)	8 ( 100)	24 ( 100)	26 ( 100)

〈表2〉は、「意見」を表す書き出しの文末述部の表現形式について、新聞ごとに推量、断定、願望、当為の頻度を集計したものである。

その結果、日本語は韓国語に比べて全体的に「意見」の数が少なく、また新聞社によってその傾向は多少異なるが、主張度の強いとされる「断定」「願望」「当為」の表現があまり使用されていないことが分かった。一方、韓国語は日本語に比べて全体的に「意見」の数が多く、全体の約8～9割は主張度の強いとされる「断定」表現で書き出され、さらに日本語では見られなかった主張の度合いが最も強いとされる「願望」「当為」表現が出現した。

## 5 考察及びまとめ

日韓の新聞の社説の書き出しを内容と形式の両面から比較対照した結果、日韓の書き出しの類型の一般的な特徴が明らかになった。第一に、内容の面からは、日本語の新聞の社説は、意見や見解を先に述べるというより、事柄に対する書き手の客観的な態度を表わす「a 事実」を先に述べる傾向にあり、韓国語の新聞の社説は、「a 事実」と書き手の判断や見解を表す「b 意見」のどちらかに偏ることなく、両方から書き出す傾向にある。第二に、形式の面からは、「意見」を表す文末述部を中心として見た場合、新聞の種類によっては多少程度の違いはあるものの、日本語では「断定」表現の使用が少なく、逆に韓国語では大部分が「断定」表現で書き出される傾向にあることが分かった。但し、この傾向は、今回調査対象とした朝日・毎日新聞、朝鮮・東亜日報の社説（一ヶ月分）という限られた範囲での結果である。

論説文は書き手の意見がはっきり示されるジャンルとされているが、今回の調査の結果から、日韓の社説の書き出しにおいて、日本語では書き出しから書き手の意見が述べられることは少なく、韓国語では書き出しから書き手の意見が明確に述べられる傾向が強いことが分かった。これは、文章の構造を「見出し」と「提題表現、叙述表現、反復表現」の関係から分析した李（1999：68）の報告、即ち、「文章を書く作業においてはその書き手の個性なども含め、さまざまな文章構成法が考えられるが、日本語の論説文は、まず前半で事実の報告や解説を論じ、後半に進むにつれ書き手の意見が表明される文章構成になりやすく、韓国語の論説文は前半から書き手の意見が明確に述べられ、後半にもう一度反復の形で書き手の意見が述べられる傾向がある」と一致する結果である。

以上みたように、“オリエンタル”と一括りにされた日韓の文章構造は書き出しに限って顕著な差が見られたことから両者は一括りにできない特徴を持つことが示唆された。今回は、新聞の社説の書き出しの部分だけにしぼって分析を行ったが、日韓の論説文における文章構造を探るためには、今後、書き終わりの類型についても分析をする必要がある。さらに、書き出し、書き終わりを見るだけでなく、文章全体の構造をより明確に把握すべく、書き出し・終わりの表現類型が文章全体の表現、展開、構造に与える影響についても検討する必要がある。これらは今後の課題としたい。

## 注

- (1) 相原では「書き出し」を「書き出し」または「書き起こし」と呼んでいる。
- (2) 市川（1971）では、書き出し・結びを「文章全体の運びのうえから見た、最初または最後に置かれた、ひとまとまりの内容をさす」ものと、「文章の始発・終結の表現としての」ものとを区別されているが、ここで挙げているのは後者に当たるものである。
- (3) 永野（1986）、伊藤（1996）では、文末述部の形式を重視しているが、なかには文末述部の意味する内容から、客体的表現を主体的表現として判断しているものがある。
- (4) この種類については、森本（1994:26）を参照されたい。
- (5) 調査資料に関してであるが、本稿では修士論文で扱った資料と同じものを扱ったため、資料に多少古い点があることを断って置きたい。
- (6) 「また」の代わりに「2度目の」を想定して考えてみると、「2度目の」には何かが起きたことに対して書き手が良いと思っているか悪いと思っているかの書き手の主観が現れておらず、事実としか判断できないため、本稿ではこれらを区別して考えることにする。

## 参考文献

- (1) 相原林司（1984）『文章表現の基礎的研究』明治書院
- (2) 李貞旼（1999）『論説文における文章構成の日・韓対照研究』東京学芸大学修士論文
- (3) 市川孝（1971）「書き出しや結びの書き方」『作文指導事典』井上敏夫他編 第一法規出版
- (4) 市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版
- (5) 伊藤誓子（1996）「論説文の文末述部における「段」の統括機能」『国文目白』35 熊坂敦子教授退任記念号 日本女子大学国語国文学会編
- (6) 木戸光子（1992）「文の機能に基づく新聞投書の機能」『表現研究』55 表現学会
- (7) 卓星淑（1999）「研究論文における文末表現の一考察」『ことば』20号記念号
- (8) 時枝誠記（1977）『文章研究序説』明治書院

- (9) 中西一弘 (1996) 『基礎文章表現論』 朝倉書店
- (10) 永野賢 (1986) 『文章論総説』 朝倉書店
- (11) 西田直敏 (1992) 『文章・文体・表現の研究 研究叢書 106』 和泉書院 3
- (12) 長坂水晶 (1994) 「論理的文章における冒頭文の分類と機能」『言語文化と日本語教育』 お茶の水女子大学日本言語文化学会
- (13) 野村真木夫 (1990) 「ケース 6 叙述表現」『ケーススタディ日本語教育の文章・談話』 桜楓社
- (14) 林四郎 (1960) 『基本文型の研究』 明治図書出版
- (15) 林巨樹 (1983) 「書き出しと結びの性格」『講座 日本語の表現 (5) 日本語のレトリック』 筑摩書房
- (16) メイナード・K・泉子 (1997) 「第 6 章 新聞コラムのレトリック」『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性—』 くろしお出版
- (17) 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』 くろしお出版
- (18) Kaplan, Robert B (1966) Cultural thought patterns in intercultural education. *Language Learning*, 16, 1-20.

(お茶の水女子大学大学院)

## **A Contrastive Analysis of the Compositional Structures**

### **—In the Case of the Beginning Sentence in the Editorials in Japanese and Korean Newspapers—**

LEE Jung Min

In this paper, types of the beginning sentence in the editorials in the Japanese and Korean newspapers are analyzed based on both contents and forms. The result shows the following two major differences between Japanese and Korean editorials. ① Japanese editorials tend to handle the contents objectively, describing ‘facts of the matter’ . On the other hand, Korean editorials tend to handle them subjectively, including ‘judgments or opinions toward the matter’ . ② As for forms, Assertive forms are less used in predicates of the beginning sentences in Japanese editorials, but on the other hand, most Korean editorials begin with assertive forms. Obligation forms, which strengthen the degree of the assertion and were never seen in Japanese ones, appeared at the beginning in Korean editorials.

According to Ichikawa (1971), the beginning sentence is thought to “lead the following entire sentences, and influence their tone,” which means that the beginning sentence plays a very important part in the compositional structure of written discourses such as newspapers. Therefore, the differences in types of the beginning sentence in Japanese and Korean editorials have profound influences on the following entire compositional structures of written discourses.

(Graduate School, Ochanomizu University)